

江戸時代越前に於ける転宗派について

芦原慧明

一

越前に於ける真宗の伝播は顯智の熊坂道場が最も古いと伝えられている。次で専空の行化もあったようで、法雲寺文書によれば専空の門弟が越前、加賀在住の者が多い。而してこれらの門弟が越前高田門徒の開祖となつてゐる。又如導が熊坂道場から大町に移つて道場を開いたのは正応三年と伝え、応長元年には覚存父子の大町滞在の事があるから、此頃から越前の真宗教団は急に拡まつたと思われる。又南条郡東谷村正善寺に蔵する本尊裏書によれば、観応二年正善坊なる住持が門徒を誘引して寺壇を挙げて真言宗から一向宗に改宗したとあるから在俗の信者が増加したのみならず他宗から真宗に転じた寺院もあったようである。その後長祿三年には専修寺の真慧が北陸を巡化して大町に滞在したと伝えている。

専修寺文書によると寛正六年六月「下野国大内庄高田専修寺之末寺越前国門徒中諱言上」という一札を叡山に入
れ、無碍光流の邪義でないという弁明をしているし、同年の文書に叡山三塔の役者の中に風尾の勝慢寺、新卿の専

光寺が東塔、西塔の雜掌として名を列ねているから既に専修寺の末寺が越前に在り門徒も多数あったと思われる。又専修寺が叡山と親しい関係にあったことも想像される。

かくて越前に於ける初期の真宗教団は専修寺系統と如導の系統であつたと思われる。然るにその後數年を経て文明三年蓮如の吉崎建立は越前の真宗教団を一変させた。殊に約百年に亘る加越の一向一揆は真宗教団のみならず越前の仏教界を支離滅裂にした。寺坊と門徒は暴徒化し、神社の殆んど総ては焼亡破壊された。天正三年信長の果敢な進撃で一向一揆は漸く鎮圧されたが、此頃には専修寺并に三門徒の勢力は尚強大であつた。しかるにその後本願寺教団が安定し強大になるにつれて越前に於ても寺坊、道場が急速に増加し、又専修寺門徒や三門徒の転派するものが現われてきた。

二

江戸時代に入って転宗派の最初にして最大なるものは本願寺の東西分派であるがこの事は周知の事ゆえ今は省略する。ただ越前でその分布を見ると概して都市部、平坦部では東本願寺派が多く山間部に西本願寺派が多いようである。このことは山間部は概して保守的であることや分派宣伝の浸透の原薄によるものであろうか。

次に寛永年間から寛文三年に亘つて二度も訴訟事件を起して漸く解決した畠中専修寺事件がある。この事件は専修寺文書や法雲寺文書によって略その全貌を知ることができるし、辻善之助著日本仏教史第九卷、拙編福井県丹州郡誌にもその概要が戴っているから此処で詳述することは差控えるが、この事件は畠中専修寺の空恵、真教の二代三十年間一身田専修寺と本末を争つたのであるが、その縁由するところは古く永正年間応真と真智との専修寺住持職の相統争いに端を發しているものである。

寛永十一年と寛文三年の二回に亘る幕府の判決は二回共本山側の勝訴に帰し畠中専修寺はその土地建物など一切の財産を本山に没収され、寛文三年の判決では真教、専誉父子は江州に流されて漸くこの事件は終末をつげた。又最後まで真教に加担した大野専西寺、新郷専光寺を初め坪谷法円寺、赤坂興正寺、御簾尾東光寺、篠岡専照寺は同じく土地建物の一切を本山に没収された。畠中専修寺を初め専西寺専光寺などは恐らく数千の門徒を擁し各地に道場を持っていた大坊であったが、寺を没収された僧侶と門徒は多くは仏光寺や東西本願寺に転派した。即ち畠中専修寺には寺内に海乘、信行、観明、実浄の四坊があったがこれらの僧侶と門徒は分裂して一は仏光寺派へ転じて西雲寺と称し、一は法雲寺と号したが法雲寺はその後更に東本願寺派に転じた。法雲寺に専修寺の文書を多く藏しているのはこの故である。又門徒の中には附近の東本願寺末寺の門徒に転じたものも多いようである。

専西寺門徒は一部は専修寺派に残り専福寺を称し、一部は仏光寺派に転じて西応寺を称し、一部は西本願寺に転じて専福寺を称した。専光寺門徒は越後にあるものは託明寺を称し大聖寺にあるものは専光寺を称して共に東本願寺派に転じ、越前にあるものは一部は専修寺派に残って松樹院と安養院に属し、三国道場は東本願寺に転じて智敬寺と称した。その他の坪谷法円寺は法栄寺と称して山元派に転じ、赤坂興正寺は西本願寺に転じて光照寺と称し、御簾尾東光寺、篠岡専照寺は現在はなくなくなっているが笹岡に称連寺を興して仏光寺派に転じた。

尚この事件に関連して一村全部が真言宗に転じたもの二村、一部転じたもの一村ある。又日蓮宗に転じたもの一村ある。真言宗に転じたものは村の富豪が当時敦賀に在って高德の名のあった真言僧秀政を招じて寺を建てたものであり、日蓮宗に転じた村は本山専修寺に対する不満から日蓮僧に帰依したものであった。この事件によって越前に於ける専修寺派はその大半を失った。

いわゆる越前の三門徒と称するものは如導を開基とするものであるが如導の高弟道性は山本の庄に居ったが後横越に移って山元派証誠寺の開基となり、道性の子如覚は鯖江にあって誠照寺派の開基となった。而して大町如導の後は二男如浄、三男了泉が専照寺を継いだ。この三寺を総称して三門徒といったが明治以後専照寺だけを三門徒派と称するようになった。今一つ出雲路派毫撰寺は元來覚如の上足乗専の建立と伝え京都出雲路に在ったのであるが鎌倉の末期善智の代退転して横越に寄寓していたが慶長の初め善照の代に今の清水頭の地に移って毫撰寺を再興したと伝えている。

かように元來同一門であったものが三つの門徒に分かれ更に毫撰寺が独立して小派簇立の状態になった。殊に向一揆の際には三門徒は高田門徒と共に多く朝倉氏や織田氏に組して一揆に対抗の立場にあったので之等政権の没落と運命を共にしたのであった。

江戸時代に入って誠照寺秀山の代明暦、寛文の頃末寺の常楽寺が座席問題で紛争を起し末寺四十八カ寺と共に西本願寺派に転じた。此頃又片屋光照寺、奥野々永元寺などが仏光寺派へ転じた。中野専照寺では万治元年座席問題で紛争が起き江守善照寺が仏光寺派に転じて仏照寺と称した。又元禄の初め御影堂に宗祖の御影を安置すべきか如導の像を安置すべきかで末寺が二派に分れて紛争し、宗祖の御影を安置すべしとする末寺は大挙離末してしまつた。この時上戸専光寺は初め仏光寺派へ、その後西本願寺派に転じ、清水山専伝寺、三国勝授寺、生部瑞応寺などは西本願寺派に転じ、角原願正寺は東本願寺派に転じた。宝暦十二年には西大井専蓮寺が東本願寺派に転じ、江戸末期には末専超寺が西本願寺派に、若杉専通寺は浄土宗に転じた。

山本派では毫撰寺が清水頭に独立再興された時に三十八社常照寺を初め末寺の大部分が毫撰寺に従って転派し、北府光善寺は仏光寺派へ転じた。三門徒法脈によると和田仰明寺（東本願寺末）には証如判の「毫撰寺下毫明寺」とある本尊裏書を存し、武生陽願寺（西本願寺末）には顯如判の「毫撰寺下陽願寺」とある裏書を存すと云い、南居陽願寺（東本願寺末）もその一統であると言う。安養寺村養徳寺も元は広瀬にあつて毫撰寺末であつたと云う。之等の寺が毫撰寺末から東西本願寺末に転派したのは江戸の初期頃かと思われる。下つて正徳十二年には花堂勝明寺が仏光寺派に転じ、浅水称名寺が東本願寺派に転じ、文化二年には敦賀郡泉村称名寺が東本願寺派に転じた。東本願寺派に於ても百カ寺騒動の際西本願寺派に転じたものがあり、西本願寺派に於ても明治初年興正派に転じた寺院があつた。

江戸時代に転宗派した寺院の明確な数を挙げることはできないがもっと沢山あるに相違ない。恐らく三門徒并に専修寺はその末寺門徒の大半を失つたのではあるまいか。越前の仏光寺末寺はその全部がこれらの転派によつてできた寺と云つてよいようである。

東西本願寺の末寺門徒は恐らくその大半は三門徒や専修寺派から転じたものであろう。殊に東本願寺は新興の本山でもあるので末寺門徒の獲得には努力をしたようである。今日本願寺末寺で専の字を冠している寺の多くは専修寺、専照寺の末寺であつたと見てよいようである。

四

江戸時代に於けるこれら転宗派については夫々個々の事情があつた事であらうが大別すると三種に分類することができると思ふ。

第一は宗意安心の上から起きたもの。真宗の宗意安心は初期の教団に於ては今日の如く明瞭ではなかったようである。尤も今日と雖も全く問題がなくなつたわけではないが初期の教団に比すれば非常に明瞭になっている。初期教団に於ては浄土宗との区別が余り明かでなかつたようである。例えば専修寺文書によると永正十八年応真に与えられた繪旨に「高田専修寺浄土宗上野流事云々」とある。上野流は下野流の誤りでないかと思うがとにかく浄土宗と云つてある。又寛正六年叡山が大谷の祖廟を破却した際越前の専修寺末寺門徒が叡山に提出した釈明書にも「法然上人の末流云々」といい親鸞という語は見当らない。——尤もこれは無碍光流の邪義でないと言ふ弁明書であるから特に親鸞の語を用いながつたのかも知れないが——當時は内外共に法然上人の流を汲む浄土宗と明かな区別はなかつたのではあるまいか。又如導の長子良如は浄土宗の寺を開いているし、江戸末期にも浄土宗に転宗した末寺門徒があるくらいだから浄土宗に近かつたようである。

然るに一度蓮如という不出世の仏法者が現われて真宗の宗意安心を余程明かにし、越前に流行していた三門徒などの安心を秘事であり邪義であると烈しくきめつけてから安心問題がやかましくなつた。殊に本願寺が京都に移つて安定し一般社会も江戸幕府の確立と共に平和を恢復してからは多くの学者が輩出して宗学が急速に進歩した。その結果真宗の宗意安心が益々明瞭になつてきた。

ところが一方専修寺や三門徒に於ては不幸にして蓮如の如き劃期的な信心者も現われず教団も小さい為めであるが宗意安心を明かにするような学者の輩出も甚だしく、そのため安心問題に於てはとても本願寺についてゆけなくなつた。そこに末寺門徒が事ある毎に教団を離散してゆく最大の原因があつたのではないかと思われる。三門徒派に起きた祖師の像として親鸞か如導かと争つて親鸞派が大挙離末したが、今日ではいつのまにか親鸞像を安置して誰も疑う者がない。これらは宗意安心が明かでなかつた一の現われと見てよいと思う。

第二は内部の勢力争いなどの紛争から転派したものだ。これは数に於ては最も多いようで本願寺の東西分派を初め畠中専修寺事件で専修寺が越前末寺の大半を失ったり、誠照寺が末寺の大坊常楽寺の座席問題で末寺の大半を失ったり、山元派と毫撰寺との関係の如きは何れもその例である。寺格とか身分とか座席とかにこだわった江戸時代の形式的な風潮の現われでもあろう。

第三には行財政面でも教化の面でも教団が微力なため起きたもの。これら転宗派の事情を見ると門徒教化の最大の礎である宗意安心を明かにすることを怠り、幕府の保護にあぐらをかいて最も大切な門徒の教化を怠ったためと思われる。畠中専修寺が繁栄していた頃の話であるが専修寺から谷を隔てて向う側三キロ位の山の頂上に国山という部落があるが、その部落で葬式があると専修寺からは式に向かず住職は本堂の向拝に曲禄を据えて掛け部落では火葬の相図に藁を焼して烽火を上げるとそれを見て「我建超誓願」とお勤めをしたと古老が伝えているが、ここにお目出度い御身分と云うべきか、とにかくそれで通ったのであった。その部落は前述の専修寺破却後他の部落と共に一村を挙げて真言宗に転じてしまった。この時日蓮宗に転じた部落も同じような原因からと思われる。昨日まで念仏していた者が今日から光明真言や題目がどうして称えられるのか了解に苦しむのであるが、恐らく平生無信心であったのである。無信心ということは教化が到り届かなかったということでないかと思う。

又宗政、財政面でも小さな教団は貧弱であり人物も少く末寺門徒を統御する力を欠いているのでつまらぬ事で紛争を起し、一致団結して教団を守り立ててゆくという熱意がない。そういう意味では殊に今日では小さな教団は愈々衰微の外ないのであるまいかと思う次第である。